

紙面

センサ

きようは終戦記念日。戦後80年の節目を迎えた。

終戦の1945年までに生まれた方は約1290万人で、全人口のおよそ1割となった(総務省推計、7月1日現在)。かつては家族や身近な人から語り継がれてきた戦争体験は、今や教科書や映像資料を通じて「歴史」として学ぶ時代へと移りつつある。

改めて注目されるのが「想像力」の役割だ。ドイツ出身の政治哲学者ハンナ・アーレント(1906〜75年)は「想像力とは、他者の立場に身を置いて考える能力」(要約)であると説いた。私たちは、自らが体験していない過去の出来事や他者の苦しみに対し、「もし自分だったら」と思い描くことで、心を寄せることができる。

記憶の継承が難しくなる現代において、想像力は、記憶と平和をつなぐ橋渡しとなる。戦争の意味を次世代に手渡していくには、体験の有無を超えて、想像を通じて学ぶ姿勢が求められている。

◇ ◆ ◇
7月9日1面で連載「街が消えた日 7・10仙台空襲 戦後80年」(計6回、2回目から社会面)が始まった。仙台市中心部は、80年前の7月10日深夜0時から約2時間にわたって、米軍機による激しい空爆にさらされた。1万2961発の爆弾が投下され、市街地は焼け野原と化し、仙台駅も焼け落ちた。死者約1400人、負傷者約1700人とされる。

連載では、空襲に遭った6人の記憶が紹介された。家族と共に必死に逃げ惑った体験や、目前で見

戦争証言 次代への糸口

た惨状など、生々しい証言が空襲の苛烈さを今に伝えた。

富田義雄さん(89) 仙台市宮城野区 Ⅱは、戦災の記憶が時の流れとともに風化しつつあることに危機感を抱いている。「80年前に実際にあった出来事だ。悲惨な過ちを繰り返してはならない」と訴える。

田口一嘉さん(84) 仙台市青葉区 Ⅱは、近所で防空壕に入ったまま家族全員が亡くなられた一家のことに触れ、「子どもたちが戦争の悲惨さを学ぶ機会をつくってほしい」と語る。

川端英子さん(89) 仙台市太白区 Ⅱは45年8月15日、疎開先で玉音放送を聞いた。外に出ると、青空が広がっていて、「もう爆弾は降ってこない」という安堵(あんど)胸がいつぱいになったと振り返る。戦争放棄を定めた憲法を仙台弁で伝える活動を今夏も続けている。

庄子雅子さん(89) 仙台市太白区 Ⅱは、多くの近隣住民が猛火に命を奪われた光景を目にし、「世界中で軍拡競争が進んでいる。人が滅ぶ出来事は、もう見たくない」と語った。

◇ ◆ ◇
仙台に生まれ育った私が、初めて知ることばかりであり、想定をはるかに超える出来事に、言葉にできない衝撃を受けた。

戦争体験の風化が進む今、こうした証言に耳を傾け、貴重な声に寄り添う記事は、想像力を育んでくれる。歴史を単なる過去の出来事にするのではなく、未来を考える手がかりとして、次世代に問い、つなぐような報道が今後も続いていくことを期待したい。



東北福祉大
総合福祉学部教授
関川 伸哉

この批評は河北新報の最終版(朝刊16版、夕刊)をもとにしています。